

八王子遺跡95 Aa 区 S K 99・100について

飴谷 一

はじめに

八王子遺跡は、尾張平野の弥生時代（前期・後期）の著名な遺跡である山中遺跡の北東約1 kmに位置する。95年度の調査から、弥生時代前期には集落の周りを環濠で囲った環濠集落であったことが確認された。またこの地域の弥生時代の石器の主要な石材で、「下呂石」という名称で呼ばれているガラス質石英安山岩（以下、下呂石とする）の剥片を多量に含んだ土坑を2基検出した。

本稿では、これらの土坑が、この遺跡においてどのような性格の遺構であったかを考えていく。

1. 八王子遺跡95 Aa 区の S K 99・100の概要

S K 99・100は、弥生時代前期の環濠から北へおよそ35mほど離れた地点で検出された土坑で、ほぼ南北に隣接して並ぶような位置にあった(図1)。共に不正円形のプランを示し、確認しえたところの規模は S K 99が径約1.6m、深さ約25cm、S K 100が径約1.6m、深さ約30cmであった。これらの埋土中からは、石器製品も含めて、合わせて約1200点程の下呂石の剥片が出土した。また弥生時代前期の土器が、小片ではあるが、数点これらと共伴していたことから、この2基の土坑を弥生時代前期の遺構とすることができよう。

S K 100の内部にはいくらか土がまじっていたので、幾度か間をおきながら、石器の剥片が堆積されていったようである。そして土坑の中層から上層にかけては特に集中した分布が見られることから、ある時期には頻繁に石器の剥片の堆積を促進させる行為がなされたと考えられる(図2)。

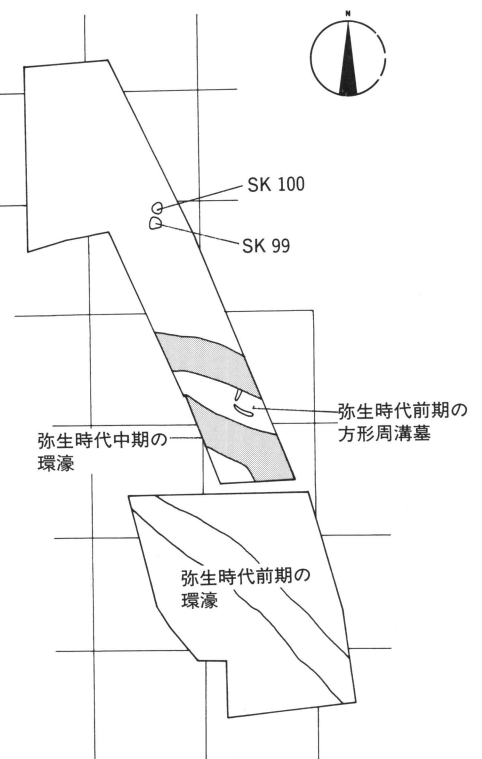
ここで S K 99・100から出土した下呂石の剥片に

についての簡単な所見を記しておく⁽¹⁾。

①石器を製作していく中で、剥片剥離作業を行った際に生じた碎片、②原石(円礫)を叩いて得られた帽子状の剥片、③②の剥片を石核として主要剥離面側から貝殻状剥片が剥離された剥片、④周囲に自然面(表皮)が廻る円板状の剥片、⑤④を石核として両面において貝殻状剥片が剥離された剥片、⑥打面を自然面とし、剥片剥離作業の後、2次的な剥離痕および折断痕が見られる剥片、⑦石核の残骸がサイコロ状になった剥片、といった形が観察された。これらの剥片のいくつかは接合することができる。

また下呂石の原石は、調査地区の他の場所からは出土しているが、この2基の土坑からは出土しなかった。

石器用
石材の剥片が多量に堆積した土坑は、他の遺跡でも時々検出され、その多くは、石器を製作した時に生じた剥片等を廃棄した土坑



(以下、 第1図 八王子遺跡 S K 99・100位置図 (1:1000))

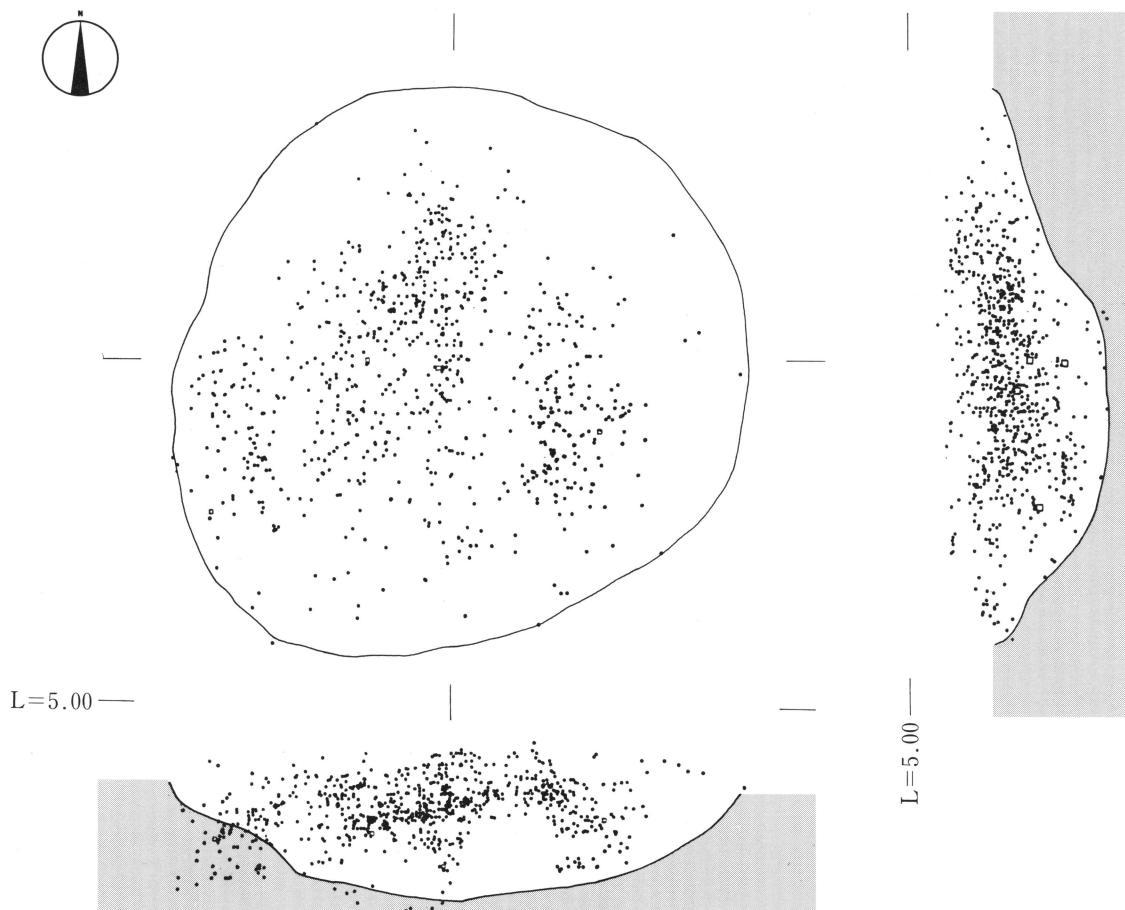
石器廃棄土坑とする)、として報告されている。八王子遺跡のS K 99・100についても、石器の剥片の出土状況や、出土した剥片のほとんどが、4cm前後もしくはそれ以下の大きさであり、「もはや石器をつくることが可能な大きさとされる基準に満たなかった」⁽²⁾として廃棄されたと考えられる。従ってこれらの土坑を「石器廃棄土坑」として扱って差し支えないであろう。

なお参考までに、八王子遺跡から出土した下呂石の原石について少しふれておく。これらは、いずれも表面が灰白色を呈した円礫で、非常によく水磨されている。大きさは4～5cm大がほとんどであるが、8cm程度の大きさのものもいくつか出土している。斉藤基生氏によれば、現在の葉栗郡木曽川町玉ノ井の木曽川の川原から6cm程度の大きさの下呂石の礫が採集できたという。そしてこ

れより以南では現在川床礫が見られないことにも言及している(斉藤：1993)。現状からの推察ではあるが、この地点は八王子遺跡から直線距離にして約5.5kmの位置にあたり、下呂石が獲得できる最も近い場所であるとみられる。この遺跡から出土した下呂石もこの付近から採集(搬入)してきた可能性がある。

2. 石器廃棄土坑を考えるにあたって

S K 99・100のような遺構について森本 晋氏による考察がある。氏は「ゴミの捨て方 ―石器製作と廃棄 弥生時代河内の事例―」という論文の中で、「打製石器製作では、必ず再利用不可能なゴミを生じることには変わらない」とした上で、「遺跡から出土する石器(ここでは製品のみならず、剥片や石核なども含めた広い意味で石器という語を



第2図 S K 100石器出土地点図 (1 : 20)

用いる)……の出土状態を詳細に分析すれば、埋納や放置といった特殊な例を峻別できるであろうし、廃棄の仕方からいろいろな引き出すことも可能になるのではないだろうか」と研究の展望を述べている。そしてそのポイントを「石器の出土状態の密度の差」と「石器の製作工程のどの段階の遺物(石器の種類)が出土したか」とに置き、さらにこれらに4つの小項目を設けて、石器が多量に出土した遺構が検出された畿内の弥生時代の遺跡を分析し、論を展開している。その結果、①石器の出土密度の状態から、石器というゴミの捨て方にも若干の差があること、②石器の出土状況によっては一概に廃棄とは言にくい場合もある、という2つの結論を導き出している(森本：1991)。

集落遺跡は、そこから見つかった遺構・遺物によって構成されている。それらが過去の人間の行動をあらわしていると考えれば、その集落の中でそれぞれの要素(機能)をもっていたはずである。それについて酒井龍一氏は、集落址を構成する遺構と遺物のカテゴリーを8つ(人間・住居址・貯蔵施設址・調理施設址・食料・道具・結界施設址・祭祀址)にまとめ、そして各々のカテゴリーには、かたちづくり、使用され、放棄されるというプロセスがあるとして、25の類型に分類した。また観察の対象とする遺構や遺物が遺跡のどの位置にあるのかといった空間的な関係や、共存もしくは重複する遺構の有無といった時間的な関係についても考慮しなくてはならないとしている(酒井：1982)。

3. 八王子遺跡95A a区のSK99・100を考える

八王子遺跡の2基の石器廃棄土坑は、一般に居住域を囲む溝として理解されている環濠の外側で検出された。この点に注目していきたい。

北部九州や山口県西部の弥生時代の前期までの環濠には、貯蔵穴の周囲を囲むだけのための施設

として機能していた例もあるが、畿内地方や関東地方では、環濠で囲まれた内側には竪穴住居や堀立柱建物などが存在して居住空間を形成しているあり方が普通である(都出：1989)。尾張平野部でも、集落をめぐる環濠は、人間が生活を営んでいく上で直接的にかかわってくる活動(衣食住およびそれにかかわる道具の作製など)を行う空間と、間接的にかわってくる活動を行う空間(墓域、水田など)とを区分する境界の役割を果たしていたと考えられる。

一方集落を構成している要素については、次の2人の意見が参考になる。Flanneryは集落に見られる基本施設を「住居・貯蔵施設・廃棄物処理施設・火所・屋外の作業空間・墓地」とし、それらを総称してhousehold clusterと呼んでいる(Flannery：1976)。一方、酒井龍一氏は生活のために必要な施設を「基本生活維持施設」と呼び、「住居・貯蔵・火所・廃棄物処理」の組み合わせから成るとしている。また基本生活領域およびその周囲には「水田・墳墓・水路・祭祀場・製作所」などの各種「機能活動空間」が存在するとしている。そしてこれら2つの大きな要素によって集落が構成されているとする。(酒井：1983)。石器を製作する際に生じた剥片を廃棄したと思われる土坑は、日常生活で生じた廃棄物(ゴミ)を処理した廃棄物処理施設と見ることができる。

石器を製作していたと考えられる他の遺跡ではどうか。ここでは居住域がある程度想定されている遺跡を挙げる。まず近隣の弥生時代前期の環濠集落で、下呂石による石器製作を行っていた山中遺跡(1992)の石器廃棄土坑は、居住域である環濠の内側に位置していた。また畿内の弥生時代中期の遺跡例だが、唐古・鍵遺跡(1990)では、遺跡の居住区から環濠帯にかかる地点で、サヌカイトの剥片を大量に廃棄した土坑が検出されている。喜志遺跡(1983・1995)でも環濠の内側で、石器

の製品や末製品、サヌカイトの剥片を多量に含んだ溝や、これらを一括投棄したと思われる土坑が検出されている。これらの遺跡では、石器廃棄土坑はいずれも居住域内に設けられ、付近で石器製作を行っていたようである。

しかし八王子遺跡では、居住域ではなく墓域という、いわば非居住空間で居住空間でみられる施設である石器廃棄土坑が検出された。この理由について次のような考え方ができるのではないだろうか。

① 当初より、居住域から離れた（あるいは隔離された）場に、石器製作にかかわる廃棄物処理施設が設けられていた。そこにはもはや石器製作には不向きな石屑のみが区別されて、廃棄された。

② 居住域から離れた場所に、石器を製作する場が別に設けられていた。そこは何らかの形（例えば、作業空間を示す溝、人間の認識による精神的な結界、など）で墓域とは隔絶された屋外の作業場であったか、作業をするための建物といったような施設を伴っていたかもしれない。

③ 居住域にあった石器製作にかかわる廃棄物処理施設が、何らかの理由により本来の場から移設せざるを得なくなり、居住域外へ移された。

④ 石器を製作するための石材（材料）を保管するために、埋納をしていた。

④については、これらの土坑から出土した石器の剥片の状況から見て、可能性は無いだろう。

おわりに

今後、石器製作を行った他遺跡の個々の遺構の配置を時間的・空間的に比較検討することにより、集落の中での作業空間を考えることができよう。

注

- (1) 用語の記述については、八龍遺跡（西村：1993）や尾崎遺跡（佐野：1995）で出土した石器の分析にならった。

- (2) 「残存長 5 cm以上の石核から生産できる剥片は2分の1長としても2.5 cm程度となり、石城他の製作には適合するが、4 cm以下の原石では目的とされる剥片が十分はぎ取れないことであろう」という山中遺跡から出土した石器の分析を参考にした。（石黒：1992）

引用・参考文献

- 石黒立人 1992「Ⅴ 考察：第2節－3. 石器」『山中遺跡』
（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 斉藤基生 1993「下呂石－飛驒・木曽川水系における転石の在り方」『愛知女子短期大学紀要』26
- 酒井龍一 1982「集落址からみる人間の精神構造－行為観察のチェックポイント」『歴史公論』82
- 1983「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』第3集
- 佐野康雄 1995「下呂石を素材とする剥片剥離法について－尾崎遺跡を中心として」『考古学フォーラム』6
- 都出比呂志 1989「環濠集落の成立と解体」『日本農耕社会の成立過程』
- 西村勝広 1993「第5章 まとめ」『八龍遺跡B地区発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財調査センター
- 森本 晋 1991「ゴミの捨て方－石器製作と廃棄 弥生時代河内の事例－」『考古学研究』第38巻第3号
- Flannery, Kent V.ed 1976,
The Early Mesoamerican Village, Academic Press
- Michael B. Schiffer 西藤清秀訳 1983
「考古学的情況と体系的情況」『考古学論攷』第9冊
- 大阪府教育委員会 1983『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要』Ⅵ
- 田原本町教育委員会 1990『田原本町埋蔵文化財調査年報』1
- 羽曳野市教育委員会 1995『羽曳野市史』第3巻